法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

<研究>那須扇状地の開拓村

島村，勇二

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
61
(発行年 / Year)
1956-05-01

那須扇状地の開拓村

島村　勇二

(1) 殿様農業のあつた貧しき開拓村

那須野ヶ原の開拓村は、北関東における低位生産地帯として知られ、その開拓は、明治維新後、中央政府、維新の元勲、等の熱心な努力にもかかわらず、貧しき村、と云うことで良く人々に知られている。中央に近いという位置を占めながら、今日なお低位生産地帯という地理的特性は、如何なる経済社会的諸条件や、自然的諸条件に存するものであろうか、

(2) 畑作地の多い開拓村

昭和22.8.1、センサスによれば、山林、荒野が多く、耕地率は約27%にすぎない、更に耕地中に占める水田率は極めて少なく、北関東畑作地帯内においても、典型的な畑作地帯といえる。農業生産の進化を商品生産の侵透程度を示めす、農業経営方式と土地利用に存する、作物構成を見るとつぎのとおりである　(第1図)

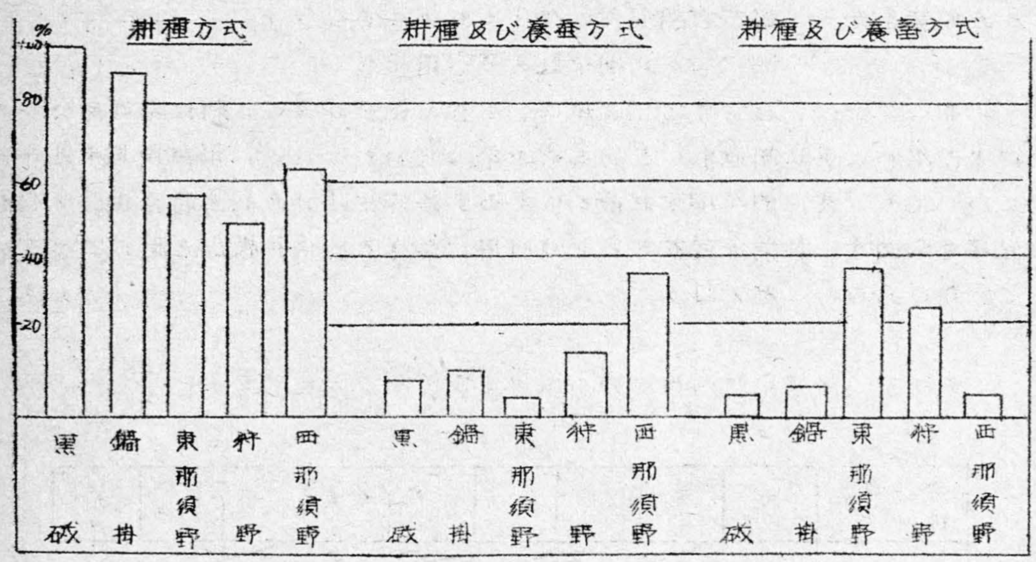
第1表　那須扇状畑作地帯の作物構成（25.2.1 世界農業センサス）

村別＼作物	稲	麦	雑穀	豆類	芋類	蔬菜	工芸	飼料作物	その他
鍋掛	45.4%			71.1%		41.2%			
黒磯	83.8%			62.1%		47.4%			
東那須野	73.1%			70.0%		56.7%			
	52.9%			53.7%					
	35.3%			64.5%		92.1%			

当地帯は、主要作物として、米、麦、雑穀が支配的で陸稲、玉蜀黍の作付を基幹としており、加えて商品作物たる煙草、または桑が組合されそさい、搾油、工業原料、果樹等の一般的商品作物の作付は甚だ少い。また経営方式においては（オ２図）大部分が耕種方式で、耕種と養蚕の結合か、耕種と家畜の結合で見られる。従つて、単一商品生産型ではないが、その複合程度が弱く、そして畑作経営が中心であることは、一般に、日本において畑作農

オ２図　　経営方式

22.8.1 農業センサス



業経営が、水田農業経営に比較し、技術水準、及生産力の立遅れが問題になる如く当地帯においては、こうした事情が更に土地の低位生産力に原因し、その経済力の貧困さを示めしていたのではなかろうか。

（３）開拓地と貧乏な村との関連

那須野ヶ原の開拓村は、開拓地なるが故に貧乏だという考え方が信じられている。開拓地 ＝ 貧乏村　とは一体どんな関係があるのか

いわゆる維新の元勲ともいうべきお偉方に着眼され、当時、文明の開花という思潮に乗り、ここに大農場が建設され劃期的な農業経営が実施されたが、これは不成功に終り名称だけの大農場で後には小作農地に変化したのであつた。直接開拓民は、生活の困窮者で、火山灰地、酸性度の強い、ヤセ地に、やつと雨露を防ぐ小屋で、過重労働に耐えていつたのである。

要するに開拓地と開拓民の斗争の過程から指摘されるものは

１、明治以後の日本の発展期にありながら困難な事業であつた。

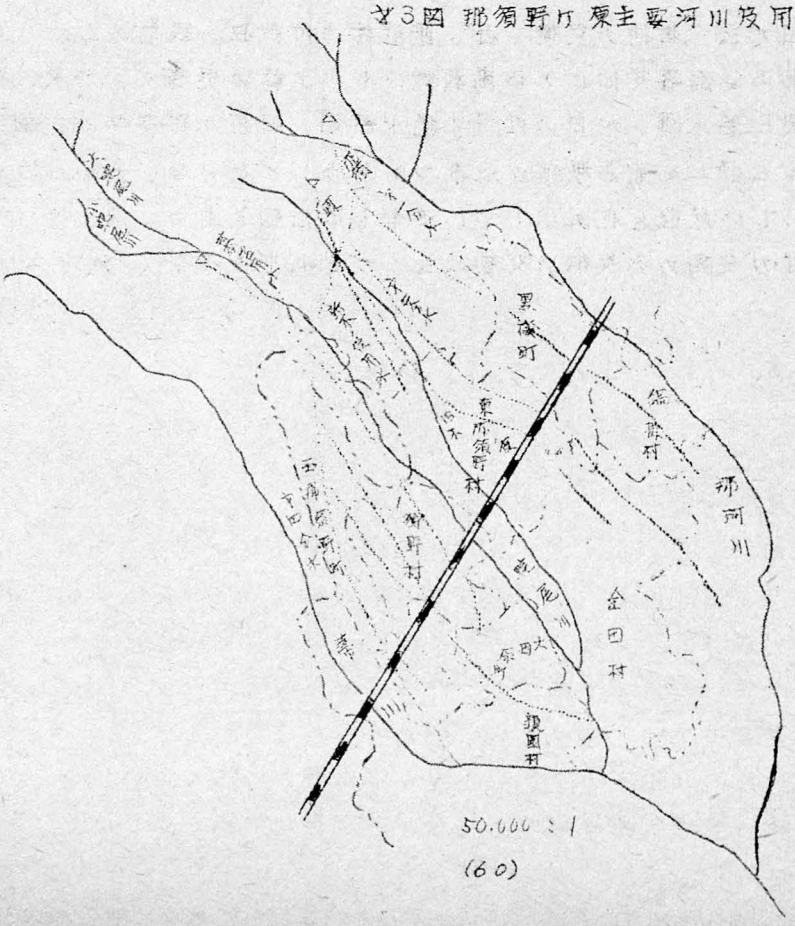
2、農業の資本家経営が芽生えつゝも崩壊していつた。

3、畑作農業から水田農業へ移行していつた。

これらについて具体的に、しかも実証的に追求せねばならないっだが、ここにおいては論ずる余地がないので省略する。しかし許される範囲に於いて述べると、

(1)、(2)については、いわゆる日本農業の発展過程に対応して、開拓進行が具体的姿となつたのである事を究明せねばなるまい。ともかく調査の結果、いい得る事は、貧しき村が、偶然にしかも自然の不利が為に形成されたのではない。特権階級の地主的土地所有の下に、余りにも資本力の乏しい農民、離村を余儀なくされた農民が定着し開拓していた。当初は、開拓の仕事よりむしろ賃金労働に主体がおかれ、開拓農民でありながら農業労働以外の途に生活の糧を求めねばならず　従つてまた永住の道を失い他に転出して行つた人々もかなりまい。また中には、農業に専念しても、その収獲物の少なさに驚いて帰郷した人々もあつた。かくて、開拓地の農業は、全生命をかけた開拓農民の労力にも遅々として進行しなかつたのである。

第3図　那須野ヶ原主要河川及用水路分布図



(4) 畑作農業から水田農業への転換

上図に見られる如くハート型の病状地表面に幾條かの用水路が通っている。これらの用水路こそ、この開拓地の人々に飲料水を与え、草木に生気をもたらしたのである。特に用水路の重要な意義は、水田農業の樹立にあり、この水田農業の立地こそそこの開拓事業を押し進め、農業を安定せしめて行つたのである。また用水路の開通は、地下水の増強をもたらし、戦後は食糧事情の窮乏化、米価の騰貴等に原因して電気揚水機による開田事業が進められ、土地利用の姿は全く一変しつゝある現状である。

(5) 開拓農民の表情

部落に入って気づく事は、まず、開拓地＝貧乏という事は当らないことだ。だが、開拓農民の大部分の人々はそれを信じている。かつて、開拓民が、旧村から、流れ者、他所者、三本指、力のない人間という様々な差別が、開拓民を卑屈者に仕上げ、結びつく経済的低くさに慣れさせているように見える。だが先程も指摘した如く電気揚水に伴う開田の進行が、部落内に新しい方向を生み出している。戦後、農地改革の不徹底が、農民分解を生み、更にそれが、開田を通じて強化されているように見える。

例へば、開田方法　耕地の交換分合、採草林の所有权、技術のちがい等々；を通じてである。部落共同による揚水機でも、出費の程度が、給水、田の大小となり、更に給水量、水田の位置、給水時間、田植の順序等々、細かなところまで、水を通じて部落秩序が出来つゝあることである。勿論、新しい村の方向は新らしい意識を生み出している事も指摘出来る。例えば　共同耕種とか、生産力を高める技術の交換とか、がそれである。(1956.4.14)